教授の呟き

第75回

あふれる情報に潜む罠

東京海洋大学教授　苦瀬博仁

通じなかった好意

ある国で講演をしたとき、日本語版でプレゼンテーションの資料を準備し、先方の国で現地語に訳してもらった。日本語で発表し同時通訳がついたために、最初は気づかなかったが、日本語版と比較してみたら、現地語版では１枚のスライドが欠落していた。その国の交通標識の写真を使い、物流対策の好例として交通規制を紹介したかったのだが、削除されていたのである。国内の事情を見せたくなかったのかも知れない。

その国の事情に詳しい人によれば、「どうせ『偶然のミス』と答えるだろうから、聞いてもムダ」とのこと。しかし、このようなことが、まさか自分の身に起こるとは思いも寄らなかった。

正しい情報よりも好まれる情報か？

日本でも、首を傾げるような出来事に出くわすことがあった。

ＶＴＲの収録の際「江戸の街は良かったが、東京の街もすばらしい」というコメントは、前半分しか放映されなかった。「江戸は良かったが、東京はダメ」という制作意図にそぐわなかったからだろう。編集という名の偽装（？）ではないかと、いささか憤りを感じた。

新聞社が主催する道路ネットワークづくりの座談会では、最初から否定的な見解だけを語るマスコミ人に出会った。専門的に見れば理不尽ではあったが、聞く耳は持たず、自らの思い込みに従っていた。それとも大衆受けを狙っていたのだろうか、批判さえしていれば良しとする安易な姿勢だったのだろうか。

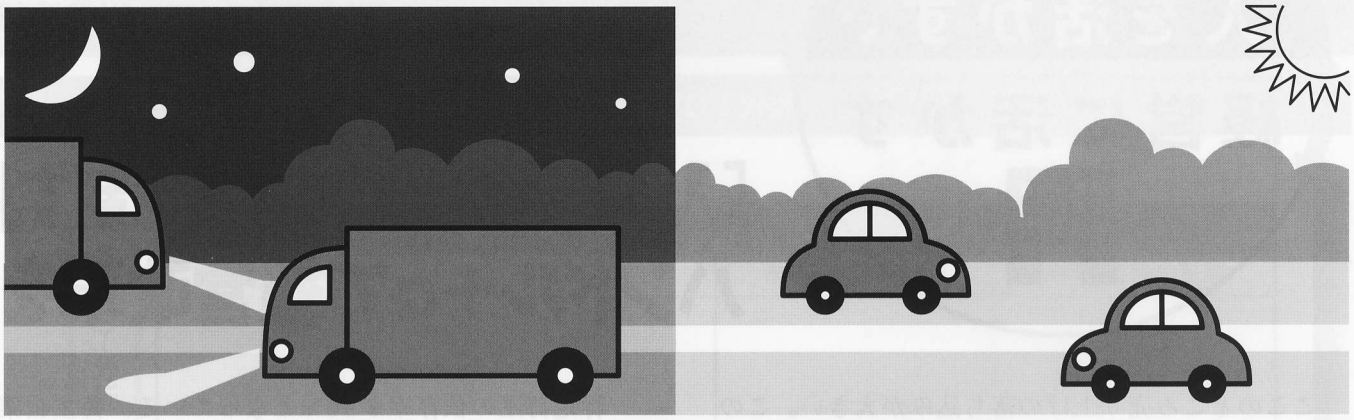
ある友人の話である。テレビのＶＴＲの取材のなかで「行き止まりの道路を造って、無駄遣いではないですか」と質問するリポーターに、「道路は手前から徐々に造っていくので、全線開通までは常に行き止まりです。他に建設する方法はありますか」と問い返したという。さすがに、放映されなかったとのこと。あまりにも粗雑かつ表層的である。

少し前話題になった公務員の深夜タクシー利用でも、報道は利用額の多寡の批判に留まっていた。なぜサービス残業をしなければならなかったのか、労働基準法に抵触しないのかになどついて、掘り下げた解説はなかった。批判される側は、イジメのように感じたかもしれない。

リポーターや台本の書き手の偏った見方や特異な主張が、報道に入り交じってくるとなると、そのまま信じて良いか心配になってしまう。

専門家の意見「信じるとき」「信じないとき」

数時間後には胃袋に収まってしまうのに、「世界に認められた３つ星レストランは、プロが選ぶプロの味」などともてはやし、プロの選択を咀嚼（そしゃく）もせずに鵜呑みにしてしまう。その一方で、何十年にも



好意的 昼と夜で、自動車とトラックで道路を効率的に使い分けている。現在の限られた道路を、最大限に有効利用している

批判的 使い分けることで定時配送が不可能となり、物流は非効率になっている。昼と夜を使い分けなければならないほど、道路は狭い

わたって国の行く末を左右する一大事なのに、空港や道路を始めインフラづくりは「庶民感覚（？）」で糾弾している。国の将来を決めるインフラづくりこそ、さまざまな専門家の意見をバランス良く取り上げるべきだろう。

それゆえ、友人の憤慨は続く。「誰だって病気になって手術をするときには、その道の専門医に頼みたいだろう。少なくとも、庶民感覚で手術方法を選択したり、競争入札はしない。ときには複数の専門医の意見を聞くこともあるだろう。なのに自らの国の将来に対して、どうしてこんなにも無責任なのだろうか…」と。

伝える者の自制心

これにつけて思い出すのは、何十年か前のテレビ番組である。相当に昔のことで、いつのことだったかさえ覚えていないが、今でも深く印象に残っている。

「鉄道列車を待つ乗客の長い列の写真」を見せて、見出しの違いで印象が異なることを説明していた。好意的に書くときには、「この国の人は、列車を待つときに、整然と並ぶほど礼儀正しい」。批判的に書くときには、「この国の列車は時間通りに来ないため、こんなにも長く並んで待たなければならない」。

もちろん、公平かつ客観的ということは至難の業である。そもそも報道も文章も写真も、主張があって良いはずであるが、少なくとも意図的な誘導や操作だけは避けるべきだろう。ただし、主張と誘導の境目を見極めることは難しい。

何十年も前のテレビ番組から感じたことは、伝える者の責任の重さと、現実を客観視しようとする努力や偏った情報を伝えないための自制心だった。

多少なりとも文章やコメントに関わる者として、戒めとしておきたい。

Profile

東京海洋大学　海洋工学部
流通情報工学科　教授

苦瀬博仁

（くせ　ひろひと）1951年東京生まれ。73年早稲田大学理工学部土木工学科卒業。81年、同大学大学院博士課程修了後、日本国土開発に入社。86年東京商船大学助教授、94年より同大学教授。2003年大学統合により東京海洋大学、副学部長、評議員、流通情報工学科長を経て現職。94年から95年の1年間、フィリピン大学客員教授。04年6月より東京大学大学院医学系研究科客員教授(併任)。主な著書に「付加価値創造のロジスティクス」（税務経理協会）、「都市交通ー都市交通計画・都市物流計画」（丸善）、「マニラ・エンジョイ・トラブル」（論創社）、「明日の都市交通政策」（成文堂）、「都市の物流マネジメント」（勁草書房）http://www2.kaiyodai.ac.jp/~kuse/